

であるが、妻飾に就ては他日改めて述べる事にす
る。(大正十二年七月七日稿了)

訂 正

第六卷第三號第一四六頁上段第五行、支輪の説明のうち、「圓くて眞直」を「方形で眞直」し、其次の一句「だからまるで……並べた様である」の二十二字を削る。

理由。私の記憶違ひで、法隆寺金堂天蓋・橋夫人厨子天蓋・海龍王寺五重小塔初重内部の、様に四角な棒であったからである。毎度不注意に原因する誤りが多くて申譯のない事である。

正 誤

頁 段 行 誤

正

一四六 上 七 天蓋のこは

天蓋のもの

下 一 一 分つ大體

先づ大體

一四七 上 一〇 肘木から肘木へ 肘木から肘木へ

一五一 上 四 方が對し

「對し」の二字削除

上 一六 外角

外角

一五五 上 一七 (狭) 面

(狭) 面

紹 介

● 歴史學概論

丹羽 正義著

近時吾國に於てはバーデン學派の歴史哲學の影響をうけて史學理論の領域が大いに開拓され、歴史の本質を闡明せうこの努力が試みられた。本書もかゝる試みの一として現はれたる眞摯の勞作である。史學者たる著者は哲學によつて科學としての歴史の概念を確立し、これに批判的考察を加へ、以て歴史學といふ獨立科學を確立せうと試みた。先づ緒論に於いて近世科學の批判的考察の意義を明らかにし、次に第一部歴史學の批判的確立に於て科學としての歴史に嚴密なる論理的批判を加へてゐる。そのうちの第一章歴史の概念、第二章知識の問題、第三章經驗的實在、第四章經驗科學に於て一般科學の批判的考察によつて歴史の根本たる經驗的實在の意義、歴史の認識の根據を明らかにし、第五章歴史學に於て、歴史は藝術的直觀の作物である、歴史に於て意義あるものは想像に満ちた形式の所産であるとする見解は承認され得ない

ミ所謂歴史藝術論を否定し、歴史は一個の文化科學である、文化價值一般を學的アプリアリミして經驗の個性文化的認識を求むる科學であるミ結論してゐる。以上第一部に於て獨立の科學としての歴史學を確立したる後、第二部歴史學の研究方法に説き進み、第二章經驗的實在の確立、第三章解釋に於て、歴史事實の確定方法、史料の種類、史料批判、歴史の補助科學について叙し、史實ミして確立された經驗的實在を文化價值一般に係らしめて認識して始めて史實の正だしき解釋がなし得られるミ論じた。第四章把握に於て、解釋により構成された個々の「歴史概念は文化價值一般に係らしめてましまつた全體に把握されねばならぬ、かくして眞の一般史が出来る。一般史は便宜上量的、質的に區分されるが、かくして生ずる特殊文化史はそれ自身では歴史學上無意味である、これらの特殊文化史は文化價值一般に係らしめ一般史の部分として見て始めて歴史學的に有意義であるミ叙べてゐる。かくて著者はこの見解を支那史の時代區劃に適用してゐる、支那史を量的に考察すれば殷までは部落的時代

で、これは自然の時代にして歴史の時代でない、周以後東漢末までを國家的時代、それ以後唐末までを過渡時代とし、その後現代までを普遍的文化時代とする。支那史を質的に見れば、殷までが祭卜時代でこれは歴史時代でない。周から東漢末までは政治時代、以後唐末までが過渡時代、それ以後は普遍文化時代であるミ論じてゐる、この時代區劃については學界に於て議論の多いことであらう。尙著者は卷末の附録『支那ミ國家』に於てこの考へ方を敷衍してゐる。最後に第五章敘述に於て歴史敘述が現實の再現に忠實なる點に於て科學であり、同時に個性を敘述する點に於て藝術的想像を必要とすることを承認してゐる。(京都、中外出版發行、定價金貳圓)(安藤)

●京都府史蹟勝地調査會報告(第四冊)

連年刊行の同會報告書の第四冊で、大正十一年度に於ける調査を收めたものである。本文百四十二頁、圖版四十五枚、體裁すべて前冊に異なる所なく、魚澄、梅原兩委員の一市十三郡に互る三十餘の各種の史蹟の報告が載せられてゐるが、今回は印行の期に際し魚澄學士重忠